柔道重量級における標準的な組み方と競技成績の関係

大杉鴻燿　（　福岡教育大学　）

１．目的

本研究では、柔道重量級の選手が試合中に標準的な組み方で戦う時間に着目し、その時間と試合結果の関係を明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

1)対象者：2021 年度全日本ジュニア柔道体重別選手権大会（以下、全日本ジュニアと記す）の男子 100 kg超級に出場した 19 名、2023 年度講道館杯全日本柔道体重別選手権大会（以下、講道館杯と記す）の男子 100 kg超級に出場した 33 名である。

2)分析方法：対象とした試合は、全日本ジュニアの 20 試合と講道館杯の 32 試合の全 52 試合であり、それらの映像データを基に分析した。表 1 に、5 種類に分類した試合時間の内訳を示した。

表 1　5 種類に分類した試合時間の内訳

A・・両者、標準的な組み方
B・・勝者が標準的な組み方、敗者が片手もしくは組んでいない
C・・敗者が標準的な組み方、勝者が片手もしくは組んでいない
D・・両者組んでいない、両者片手
E・・両者寝姿勢

３．結果と考察

1)男子重量級における標準的な組み方と試合結果

全日本ジュニアでは 20 試合中 15 試合（75%）、講道館杯では 32 試合中 23 試合（69%）が標準的な組み方の時間が長い方が勝利した。これらの結果から、標準的な組み方でいることが勝利には重要な要因であると考えられる。

2)全日本ジュニアおよび講道館杯男子 100 kg超級における 5 種類に分類した試合時間とその割合

図 1 および図 2 に、全日本ジュニアと講道館杯男子 100 kg超級における標準的な組み方の時間とその割合を示した。

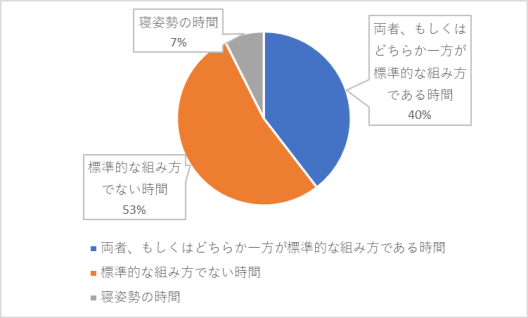

図 1　全日本ジュニア男子 100 kg超級における標準的な組み方の時間とその割合

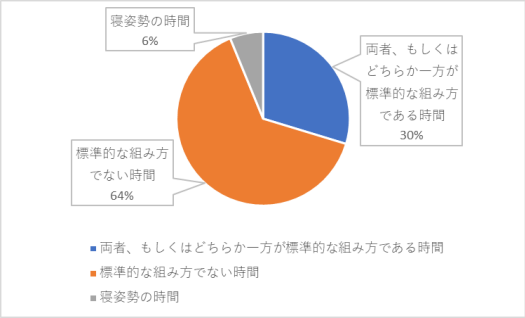

図 2　講道館杯男子 100 kg超級における標準的な組み方の時間とその割合

試合における両者、もしくはどちらか一方が標準的な組み方である時間の割合は、全日本ジュニアでは 40%、講道館杯では 30%と両大会で低い傾向が認められた。これらの結果から、競技力が高く、選手の実力が拮抗していればいるほど標準的な組み方である時間が短くなると考えられる。

４．結論

本研究では、標準的な組み方でいる時間が長い選手の方が勝利する割合が両大会で高い傾向が認められた。試合における両者、もしくはどちらか一方が標準的な組み方である時間の割合は、両大会で低い傾向が認められた。

５．主な参考文献

1)鶴田昂乙・中村勇・小山田和行（2013）ロンドンオリンピックにおける男子組手の傾向,柔道科学研究, 18, pp.18-21